

J.Wesley 説教における「完全」に関して

村上定幸

完全を目指してすすもうではないか！¹（ヘブル書 6：1、Dio.afentej ton thj archj tou/Cristou/ logon epi. thn teleioŋhta ferwneqa(nh. pal in qem. l ion katabal lomenoi metanoiaj apo. nekrwh ergwn kai. pistewj epi. qeon(だからわたしたちは、死んだ行いの悔い改め、神への信仰、種々の洗礼についての教え、手を置く儀式、死者の復活、永遠の審判などの基本的な教えを学び直すようなことはせず、キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう。 - 新共同訳 - から)

ウェスリはまず、完全を目指して歩むクリスチャンのありようを、This will we do, if God Permit,--と、書き起こしている。神がお許しになるのであればわれわれはそうすべきで。 - - -。一度神の恵みによって義とされたものが再び、悔い改めに導くことはできないと言うのである。即ち、完全を目指してすすむか、墮落するのかのいずれかの道しかないのであって、(中間の道はないのであって)非常に難しいのです、と。このわかりにくい聖句を明らかにするために私が尽くすことは、

1：完全について示すこと (to show what perfection is)

2：それに対するいくつかの反論に回答すること (to answer some objections to it)

3：そして反対者にいくらか抗議すること (to expostulate a little with opposers)

1：について説明を始めるが、ここでは、完全を、天使の(ような)完全とはしないことを断っている(perfection of Angels)。彼らは、彼造物としての制約下(for they are creatures)にあるとはいえ、最初から誤りを犯すことから免れているのである。また彼らは自分たちの意志を行うのではなく、神の御心 acceptable will of God をなしているのである。それに対して朽ちる肉体で、理解に頼る人間には、整っていないものがあるのである。angelic perfection に誰も達することはできないのである。

また、滅びる肉体にあるものは誰もアダムの完全には達することはできない。²ここでウェスリは、アダムが墮落するまでは、常似たたゞしかつたとしているがその言葉に解説を加えるならば、「罪から解放されていた」ということと同義であろう。この罪を知らなかったものが、罪を知らざるを得ないものになったのである。

人が肉体に魂をとどまらせている間に達する最高の完全は、愚かさや間違いを持つ者である。³ここで、チャールズの、主よあなたによる死のメリットをあたしは毎瞬間必要とするのです、というイザヤ書からの賛美を引用している。墮落してしまっている人間に与えられている律法は、守り得ぬ律法ではなく、愛の律法なのである。我々は、理解する力においても感情においても、これに反するので、購いの血を必要とするのである。

それでは可能な完全とは何であろうか。マタイ 22：37その他を引用して、全ては、「愛」によると結論づけている。⁴またもう一つの説明としてピリピ 2：5に関してコメントを加える。それは、「聖なるもの、愛なるものの全ては、イエス・キリストの心に含まれているのである」と結論づけているのである。もう一つの観点として、パウロの言う、御霊の実(ガラテア)に関して述べられている。またもう一つの結論として、「キリストイエスにあって新しくされなければならない」と宣言している。

¹ B.E., Sermons __, pp.71 -

² 説教の番号で 2

³ 説教の番号で 3

⁴ This is the sum of Christian perfection

⁵同様のことを、ペテロの手紙からも導き出している。What I want is holiness of heart and life.と手紙に書いているように、完全という言葉は、聖書そのものであり、現実的なものである。

次に更に「完全」ということを明らかにするために、反論を用意している。⁶説教の2がそれである。最初の反論は、神の言葉の中にその約束がない、というものである。とすれば我々は立つべき基礎をも持っていないと言うことにもなる。しかし申命記30:6をはじめ、聖書には神の約束と命令が述べられているのである。Thou shalt love thy neighbour as thyself は、命令としての約束なのである。

質問hさらに、「罪から救われる約束がるか」ということにすすむ。⁷答えは「ある」である。このことも、旧新約から説明される。エゼキエル、マタイ、ゼカリヤ、詩編など。

しかしある人は、「それは意味が違う、なぜなら、人には不可能だからである」、けれども、人にとって不可能なことは神には可能である、「罪ある肉体にありながら罪から解放される」というのは矛盾である。というものである。確かに間違⁸いからは自由になれない。

知っている法を犯すこと⁹

と説明される。また聖書には罪深い肉体、という言葉もないと説明を進める。権威も持ってい。罪深いからだがあるのではなく、霊のみが罪を犯し得るのである。罪深いからだがあるとすれば、体のどの部分が罪を司っているのかについて、解説を加えるべきである。ここで「肉にあるもの」と「肉体にあるもの」との言葉の混用に警告を発している。¹⁰ dɔ'x'a, hwhy>Wyhē & hwhy>lar'fɪl [mɪv. (Deuteronomy 6:4) は、死んだものではなく生きているものに語られているのである。

更に、「生きた証人」が存在していないことに、反論は及んでいる。少ないこと、嘘が多いこと、を認める。けれども、義と同じく、清められた、人々の内、ある人は清められているのである。更に、救いに喜びを持った人がいまは、まったく自信をもっていないことがあることがあるのである。¹¹

敬虔で敏感な人々はこれに反血するが、罪は一時的に停止 (only suspended) するだけで、神は生涯このことが続くことを計画されたのではない。これは重要なことで、明確で信頼に足る証明がない限り納得できない。もし完全を得ていないならそれは問題外であり、もし完全を得ているのであれば、異議をはさむ余地のないことなのである。「私はそのような完全な人を見たことがない」ということに対しては、今も、聖書的完全にある人を見ることができる。¹²

説教は にすすむ。残されているのhこの完全に反対する人たちに異議を挟むことである。まず、なぜ完全に達したという人達に対して怒るのか？ なぜ神がたえた賜物の最も素晴らしいものに反対するのか？¹³ その反対があなたの幸福を、左右するものなのか？ それは妬ましいことなのか？ 望

⁵ 説教の番号で7の最後

⁶ それは、聖書が語る「完全」とその現実性に対する反論とほぼ同じものであろう。

⁷ 説教の番号で7

⁸ mistake

⁹ これは、聖書的であると、述べられている。現代の日本でも、知らない法を犯したからといって、民法や刑法で罰せられることはない。

¹⁰ flesh, & body

¹¹ 説教の番号で12の(1)、(2)および(3)。そしてこの尺度は、第三者には与えられていないのである。

¹² 説教の番号で14 - 16

¹³ その意味を、反論する意味自体を問題にしているのである。聖書は、これを得ることは素晴らしいことだと命令し約束しているのである。

ましいことではないか！ これを妨げる律法はなく、理性的反論もないのである。

更に質問は続く。何故、完全（聖書に書いてある）に反対する理由を持つのか？ Universal holiness に、同じ意味なのだが、反対するのか？ 偏見があるのか？ 妬ましいのか？ 払拭しなさい！ あなたは地上に見たいと思うようになる。もしあなたがこの完全を体験したならば、手放したくないし、主イエスの来臨の時、御前に立つに恥ずかしくなくありたいとは思わないのか？ 人類全体を敵軍とすることを、このことは確かである。¹⁴更に、理性と信仰を持っている人が、罪の救いをおそれたり嫌悪したりするのか？ 繰り返している。罪とは、知っている律法を意識的に犯すことなのであって、これをおそれるのか？ Bunyan's *Holy War* と比べてみてもらいたい。¹⁵

何故、罪からの救いに反対する人々はかくも熱心にならなければならないのでしょうか。それはまるで、罪とともに過ごさざるを得ないということが、利益をもたらすかのようである。いや間違っていたと仮にしても、これに怒りを持たないでほしい、ほっておいてほしい、そこに望みがあり、勇気があるから。

Felices errore suo ---¹⁶

は、罪からの救いがあり得る、という間違いの中に、幸福であるのである。

このような対立があることの主張で、「完全において」という説教は終わっている。このことは二つの生き方があることを、聖書から説明しているのである。その一つは、清められた存在など、肉体にあるものには達し得ない、というものであり、かの日に永遠の裁きに直面することをも、必然的に主張しているのである。また、罪から救われた、と主張する人々は、地上でも幸福であり、それは苦しみを伴って得られるのではないから、左記の例とは反対に、永遠の恵みによくすることができるのである。即ち、地上で苦しければ天において平安があるのであり、地上の平安が、天における苦痛を意味すると言ったようなものでもないことを、主張しているのである。むしろ、両方で幸福であるのか、両方で、即ち常に、不幸である道の、どちらを取ろうとするのか？ と Wesley は説教しているのである。また Wesley は、完全なクリスチャンを知っているとも言っている。知っている律法を犯さぬことを、求めることに価値があるのだと、キーワード、指標のように主張している。これは苦痛と苦汁に満ちたことであろうか。反対に「罪からの解放など生きている間はあり得ない」と、自己防衛的に反論することで、満足を得ようとする人々に対して、幸福な人々である。完全を天に昇ってから求めるものではなく、この地上で追い求めるクリスチャンの特性である、と言っているのである。

HEBREW 6:05-6 神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。と完全の体験をクリスチャンに改めて証拠立てているのである。さらに teleiothta¹⁷について、主イエスがそうであられたように、*perfecting grace* は、perfecting grace に導かれる道を追い求める人々から、試みや、誘惑を取り除くものではない。¹⁸いかにして信仰者はこの世にお

¹⁴ 説教の番号で 7(p.85)で強烈に主張している。

¹⁵ 説教の番号で 1 1、これを否定する時、完全について理解できなくなってしまうと述べることができる。垂火の踏み場も罪には与えないのが完全なのである。

¹⁶ Lucan, *Civil War*, i.459

¹⁷ Form: teleiothta

teleiothj n-af-s (noun acc fem sing) 1

¹⁸ Oden, Thomas C., *J. Wesley's SCRIPUTURAL CHRISTIANITY*, p.321

いて、恵によって完全たり得るか？といこと、すなわち、罪には、小さな部屋の一室も与えず、知っている律法の一つたりとも犯さずであり得るのかについて、説教において説明を加えているのである。先行する恵に始まる救いは、罪からの許しの確信を与え、次にこの経験を、あらん限りの注意深さを持って、手中に収めつづけることによって、御霊の実となって成長するのである、というのである。

説教におけるこのことに関する説明は、量としては多くはない。むしろそのことに否定に対して、何故反対するのか、せざるを得ないのかについて述べている。「自分の知っている」というのは、客観的な言葉ではないが、それを補うのが、聖書にある御霊の実である。これは、人と人との関係、人とか身との間の関係として、客観化できるものである。聖書に照らして自己吟味できるものである。説教の目的は、このことの確信・確認にあり、反論に対して立場を明らかな立場を説明することで、明確なものとしようとしているのである。完全を一度経験した者、経験したとは先に聖書を引用することで説明されているが、注意しなければならないいくつかのことを、いくつも上げ、次の如く回答を用意している。

神以外への願望に注意しなさい。あなたは神以外に何者をも求めないのだから多くの望みは消え去ったのだから、再び入り込まないように注意しなさい。¹⁹誤りと誤解と、意見の不一致から、解放されることはないのであって、自分の力では、即ちキリストの購いに、キリストの罪からの許しに絶えず支えられているのでなければこのことは、また他のいかなるよいことも、不可能であると解説しているのである。ここにキリストとその教会に対する彼の、考えが見られるのである。個人的なよい心も、よい教会観に属するのであり、葡萄と枝のたとえが、現実のものであることを、彼は主張しているのである。

Wesley にとって、完全は、愛、即ち極めて relative な内容を持つものであり、国教会の「宗教箇条」教会とは - - - 信仰者の会衆であり、そこにおいて純粋な神の言葉が説かれ、礼典が正しく (duly) 執行される。

という箇条をはみ出すこともしなかった。彼の教会（教会制度）観にも見ることができる。「一体、全ての教会制度は何のために存在しているのだろうか。それらは魂をサタンの力から神のもとへと救いだし、魂を神への畏敬と愛のうちに建て上げられたのではないか。それなら、制度はそうした目的に合致して初めて価値のあるものとなる。もしそうでないなら、制度には何の意味もない。実際、神に対する知識と愛とが、あるところならどこでも、真実の制度に欠けているということはないであろう。しかしそれがないところでは、最も使徒的な制度も無意味で無価値なものであろう [手紙、to John Smith, 1746.6.25, § 10]。²⁰これがホイットフィールドに招かれプリストルで野外説教をしたことに対して加えられた「教会制度を乱す」という批判に対する、ウェスリの回答であった。ウェスリの聖化に関する理解は、ここでもその社会的であることを示している。人々が成長できるのは、神が働き続けておいでになるからであり、人々は、礼拝と聖餐によってその力と恵に浴することができるのである。そこに聖徒の交わりである「共同の教会」が成立し、またその理由を持つのである。説教の次には、「霊的な礼拝」²¹について述べられているが、すでに示したように、教会とは目に見える、ところ番地の持ったものであり、またそこがどこであっても、霊的な礼拝がささげられているのであれば、共同の教会が聖なるのは、・・・それが実際に聖いからであり、そこに属するひとりひとりのメンバーが、各々が程度のも、主が彼らを、聖いと呼ばれるように聖いからである。成長を目指さない者は、会員足り得ない。

¹⁹ Wesley John, A Plain Account of Christian Perfection, p.93, 「第五は何か？」にたいする回答

²⁰ 藤本満、『ウェスレーの神学』, p.329 より。

²¹ p.88-

「全き愛」は、ただ個人的なものではなく、相互の關係に及ぶのであり、根拠を有し得るのである。ここに教會の形成があるのである。また保証として、聖禮典、聖餐と洗礼があるのであり、Wesley も一度も放棄しなかったことである。聖徒の交わりが、その成員たる會員の聖化を可能にするのである。

現在、聖化をめぐる様々な意見、神学的にも、信仰感としても聞かれる。私見ではあるが、愛餐、御言葉とならんで禮拜の中心をなす、聖餐に関して、メソヂスト(フリーメソヂスト)各教會に於ける混乱がもたらされているようである。聖餐の、open と closed-ship に関して、議論なく、各教會のやり方が基準になっているようである。大切なことは、議論がなされない基盤にある。幼児洗礼に関しても同様のことがいえる。教會の子たるものが、聖餐に与ることのできない權威の問題。裏から言えば、「大人」の決意と理性に支えられた「告白」を、そのみを、受洗の權威とすることがどうして可能なのか、議論される必用があるように思われる。

確かに、フリーメソヂストの式分には、受洗者に限るという文言は、聖餐に関しては記されていない。けれどもこれはキリスト者の會衆、聖餐によりたのみ、キリストに与ろうとするものに対するものであって、記されていないから問いて、仏教徒にも発せられる式分ではないはずである。恐らく、受洗していないものにとっては、聖餐は意味なく「変わった儀式にしかすぎない」ことになる。

我々は：教會を失っても、信仰上何一つ失わないような理解

教會(交わり)を失って信仰の大部分を失うように思える理解

の両極の中に生きている。大きな教會組織を持ち合わせたことのない、にほんでは特にこのことが分かる。聖化と完全について考察するとき、教會觀と獨立(別に)に論じられないと思える根拠がここにある。